

陳 述 書

平成24年3月12日

明日香 壽



今回問題とされている9項目の特徴のうち、「三段論法の間違いなどロジックとして誤謬がある」という特徴について、以下ご説明いたします。

(1) 一般に、三段論法は、大前提・小前提・結論からなる推論式です。

例えば、代表的な三段論法は、

- ① すべての MはPである。
- ② すべての SはMである。
- ③ 故に、すべての SはPである。

のように、2つの前提から1つの結論を導き出す推理です。

前提②を小前提といい、前提①を大前提といいます。

懐疑論の中には、一見、大前提・小前提・結論を構成して論じられているようでも、それぞれの前提自体に誤りがあったり、小前提が全称肯定判断（「すべてのSはMである。」）ではなく特称肯定判断（「あるSはMである。」）であったりするために、三段論法として成立せず、ロジックとして誤謬のあるものがあります。

(2) 被告ら準備書面（3）6頁で述べた具体例を大前提・小前提・結論の構成に整理してみると、以下のようになります。

大前提：人間が放出した二酸化炭素の約3割は海洋・森林に吸収される。

小前提：人間が放出した二酸化炭素は選択的に吸収されるので、人間が放出した二酸化炭素のうち大気中に残存するのは3.33年分の放出量である。

結論：よって、人為的に放出された二酸化炭素の大気中滞留時間は短い。

しかし、実際には、地球全体では海洋・森林は、現在、正味で二酸化炭素を吸収していて、その年間吸収量は、量の大きさとして、人間が1年間で放出する二酸化炭素量の約3割です。すなわち、小前提にある「人間が放出した二酸化炭素は選択的に吸収される」というのは間違いです。

この意味で、上記議論は小前提自体に誤りがあり、三段論法として成立せず、ロジックとして誤謬があります。

(3) 以下、「三段論法の間違いなどロジックとして誤謬がある」という特徴について、より単純な具体例を述べます。

ア 懐疑論の中には、以下のような議論があります(乙6の2・2枚目・左頁5行目以下等)。

大前提：温暖化とは世界の気温が上がることだ。

小前提：日本の気温は上がっていない。

結論：だから温暖化は起きていない。

この議論は、気温上昇が見られない地点を殊更に取り上げ、温暖化は起きていないとするものですが、人為的温暖化説が問題としているのは地球全体の平均気温で起きている上昇傾向です(乙1・10頁等)。

上記議論は、小前提が全称肯定判断(「すべての地域の気温が上がっていない。」「地球全体の平均気温が上がっていない。」)ではなく特称肯定判断であるため、三段論法として成立せず、ロジックとして誤謬があります。

イ 懐疑論の中には、以下のような議論があります(乙6の3・2枚目・右頁17行目以下等)。

大前提：温暖化説は産業革命以降の気温上昇を主張する。

小前提：産業革命以降、気温が下がっている時期がある。

結論：だから人為的温暖化説は間違っている。

この議論は、短期的な気温低下を殊更に取り上げ、温暖化は起きていないとするものですが、人為的温暖化説が問題としているのは長期的な気温上昇

傾向です（乙1・10頁等）。

上記議論は、小前提が全称肯定判断（「産業革命以降、長期的に気温下降傾向がある。」）ではなく「下がっている時期がある。」という特称肯定判断であるため、三段論法として成立せず、ロジックとして誤謬があります。

ウ 懐疑論の中には、以下のような議論があります（乙1・32頁・議論14）。

大前提：人為的温暖化説は二酸化炭素が原因で気温が上がると主張する。

小前提：過去においては温暖化が原因で二酸化炭素濃度が上昇している。

結論：だから温暖化説は間違っている。

この議論は、気温上昇を原因とする二酸化炭素濃度の上昇を人為的温暖化説が一切認めていないことを前提としていますが、人為的温暖化説は、状況によっては気温上昇を原因として二酸化炭素濃度が上昇するということを認めています。

すなわち、上記議論は大前提自体に誤りがあり、三段論法として成立せず、ロジックとして誤謬があります。

以上